ジョン・スチュアート・ミル著 竹内一誠訳「大学教育について」岩波文庫、岩波書店 2011 年 7 月 15 日刊を読む

文法とは何であるかを考える

１．単なる一言語としてみても、その規則的かつ複雑な構造のゆえに、ギリシャ語とラテン語ほど知性の訓練にとって価値ある言語は近代ヨーロッパ言語には見当りません。

２．ここでちょっと、文法とは何であるかを考えてみましょう。

３．文法とは論理学のもっとも基本的な部分であり、思考過程の分析の第一段階であります。

４．文法の原則、規則とは、言語形式を普遍的な思考形式に対応させるための手段です。

５．いろいろな品詞間の区別、名詞の格の間の区別、動詞の法とその時制との区別、小辞の諸機能の区別は、単に言葉の上での区別だけではなく、思考上の区別でもあります。

６．単一の名詞と動詞とは、各々、対象と事象とを表わし、それらの多くは感覚によって認識されます。

７．一方、名詞と動詞を結合する様態は、対象と事象との関係を表わし、その関係は知性によってのみ認識されます。

８．それぞれの異なる結合様態は個々の関係に対応するのであって、すべての文の構造は論理学の教材であります。

９．文章構成法（シンタックス）のさまざまな規則に従って、われわれは、命題の主語と述語を区別し、また命題の行為主体と行為と行為客体を区別します。

10．その規則に従って、どんな場合にある観念が他の観念を修飾または限定しようとするのか、あるいは単に結合しているにすぎないのか、どんな断言が定言的であり、どんな断言が仮言的にすぎないのか、文意が類似関係あるいは対照関係を表わそうとしているのか、複数の断言を連言的にあるいは選言的に構成しようとしているのか、また、文のどんな部分が、たとえ文法的にはそれだけで完結しているとしても、文全体によって表わされる断言の単なる一要素にすぎないのか、あるいは従属部分になるのかを、決定するのです。

11．こうしたことが普遍文法（ユニーヴァーサル・グラマー）の主題を成すのです。

12. そしてこのような主題をわれわれにもっともよく教えてくれる言語は、もっとも確定的な規則をもち、思考によって区別されうるものすべてに対して明確な形式を与えるような言語に他なりません。

13. したがって、もしわれわれがそのような形式に対して細心の注意を払うことを怠れば、文法違反を犯すのは必至でありましょう。

14. このような特性をもつという点で、古典語は、すべての現代語に比べても、否、死語であろうと現用言語であろうと、一般的研究に値する文献をもつ他のすべての言語に比べてみても、比類のない卓越性をもっているといえるでしょう。

15. しかし、教育的価値から言えば、文学そのものがもつ卓越性の方がはるかに重要であり、しかも明白であります。

16. 文学がその伝達手段として伝える素材の内容的な価値という点においてでさえ、ギリシャ・ローマ文学はまったく他の追随を許しません。

P43 ～ P45

＜コメント＞

（1）「文法」とは一般的に記述的なもの、つまり、言葉が現実の場でいかに使用されているかを記述するものと考えられているが、ミルのいう「文法」とは、ここでは、言語一般がもちうるいわゆる普遍形式の意に解されうるかも知れない。＊以上、訳者注(27)より引用。

（2）最も効率的なヨーロッパ言語の習得法は

①「ラテン語」の直系である

②「スペイン語」文法の接続法まで学んだ後に、「スペイン語」に最も近いとされる

③「イタリア語」

④「ポルトガル語」

⑤「フランス語」を学ぶことだとよく言われている。

「ラテン語」→「スペイン語」→そのあと「イタリア語」「ポルトガル語」「フランス語」を一気に。この順序は参考になる。英語は世界の共通語なので、すべての言語と同時並行して学ぶこと、当然と言われて久しい。

（3）ジョン・スチュアート・ミルのセント・アントルーズ大学名誉学長就任講演「大学教育について」は、これから大学進学を考える人、大学で学んでいる人、学んだ人、すべての教育関係者に大学とは何かを真正面から問う古典中の古典。是非、御一読を。

― 2016 年 1 月 31 日（日）　林　明夫記―